

銃剣道の理念と技術の特性

社団法人 全日本銃剣道連盟 専務理事 兼坂 弘道

銃剣道修行の理念

銃剣道の修行は、たゆまない努力によって心身を鍛錬陶冶し、礼節を尊び、信義を重んじ、規則を守る習慣を身につける等、社会人として必要な道徳性を高め、「正しく、明るく、強く、逞しい人間形成」を目指し、精進して行くことを理念としている。

この理念は、銃剣道の修行段階において武道の真理を探究し、心身の鍛錬を通じて人として社会生活を健全に営むために必要な気力・体力を養い、競技力を高めるスポーツ的效果を生かして、余暇を有効に活用して生活に対しての潤いを養い、社会人としての品格教養を高め、粗暴な行為を戒めることに寄与できることを念願し、個人としては武道としての真理ともいえる「正しさ」を尊び、人格を尊ぶ、「礼節」を重んじ、「卑しきを用いない」正々堂々とした態度を育成して、人としての歩むべき道を求め、将来に対し常に積極的で明るい発想をもち、ストレス・プレッシャーに対しての抵抗力を養うことをねらったものである。その端的な表現を「正しく、明るく、強く、逞しい」としたのである。

理念を更に具体的に記述するならば、銃剣道のアイデンティティは何であることを明らかにし、銃剣道の特性を十分に理解し、共鳴へと発展し、自らが進んで精進努力してもらえようように心がけているところである。

銃剣道のアイデンティティを要約するならば、

- ① 銃剣道は、わが国の伝統的武技の一つである、槍術を源流とした武道種目である。
- ② 銃剣道は、わが国武道の美風である「誠実」「礼節」「勇気」「質実剛健」及び「克己心」等の精神徳目を養成し、社会に有為な人間形成に貢献しようとするものである。
- ③ 銃剣道は、「突く」「抜く」「打つ」「払う」「押す」「引く」「かわす」「走る・跳ぶ・歩く」等の、人間が生活する上で欠かすことのできない、基本的運動能力を育成しながら身体的性能力を高め、国民の健康・体力づくりに貢献し、豊かな社会生活をするための市民スポーツ的な面を助長しようとするものである。
- ④ 銃剣道は、「突き技」という最も単純平易な身体運動であるから、青少の若い段

階から馴染やすい反面、突き技の神髄を極めるには奥深いものがあり、技倆の継続的な練習が必要であり、練習（稽古）を重ねることによって生涯を通じての向上心を刺激し、生涯学習としての要素を満足させようとするものである。

- ⑤ 銃剣道は、木銃を用いて双方相対して行う対人競技であり、定められた「突き部位」に対する「突き技」の成否で勝敗を決するものであるから、「打つ動作」は相手の木銃を払う場合以外には用いない。
- ⑥ 銃剣道は、稽古及び試合を通じて「知」「情」「意」バランスの撮れた精神発達を図り、社会的適正を育成し、心肺機能・筋力・敏捷性・反応能力及び全身持久力を高めようとするものである。
- ⑦ 銃剣道は、武道種目が共有している、「礼儀」「良い躰」「良い習慣」を日常の稽古の課程から習性化しながら、導入段階において「楽しさ」「面白さ」を自得させ、「やってみよう」という自覚性を助長していくものである。
- ⑧ 銃剣道は、順序正しく習得し、用具を正しく用いることにより、安全で運動量の大きい武道である。

以上を銃剣道のアイデンティティとし、「やって楽しく、見て面白さ」を感じさせ、その中で武道としての銃剣道の本質を身につけてもらい、試合においては、「スピーディーで美しい試合」ができ、「勝つに卑しき技を用いず、敗れて卑屈な態度に陥らない」正々堂々とした態度が維持できるように努力することを主眼としているのである。

銃剣道の由来

銃剣道の前身的存在である銃剣術は、明治建軍当時に兵員の武技として採用されたものであるが、当時は剣術優位の中において、銃剣術の必要性を主張する勢力が胎動し、剣術・銃剣術双方の真剣な論議の末、銃剣術組みが優勢となり、軍隊に銃剣術が採用されたものである。

軍隊の武術に銃剣術の採用を主張したのは、フランス留学から帰国した斎藤徳明であり、剣術を主張したのは、戊辰戦争の官軍側で活躍した山地元治であったと言われている。

当時の各鎮台（師団）において用いられた銃剣術（銃槍術とも言われていた）は、わが国古来の槍術から創意されたものが主流で、1880年5月明治天皇が、陸軍戸山学校を視察された際に、同校の教官・助教が天覧に供したものは、木銃の長さが220

センチメートルで、防具は槍術用の物が使用され、技倆としては長槍の「繰り突き技」が多用されたとの史実が残っている。

明治建軍当時のわが国陸軍の軍制はフランスの制度を採用した関係もあり、1874年（明治7年）にはフランス体操教官ジュクローがフランス剣術（フェンシング）を紹介し、1884年（明治17年）8月にはフランス陸軍中尉ド・ビラレー及び軍曹キエールを銃剣術教官として陸軍戸山学校に招聘し、フランス式の銃剣術教育が始められた。その原形は図～1のとおりである。

突きの動作及び「足さばき」はフェンシングに類似し、当時は「バイヨネット」と呼ばれていた。

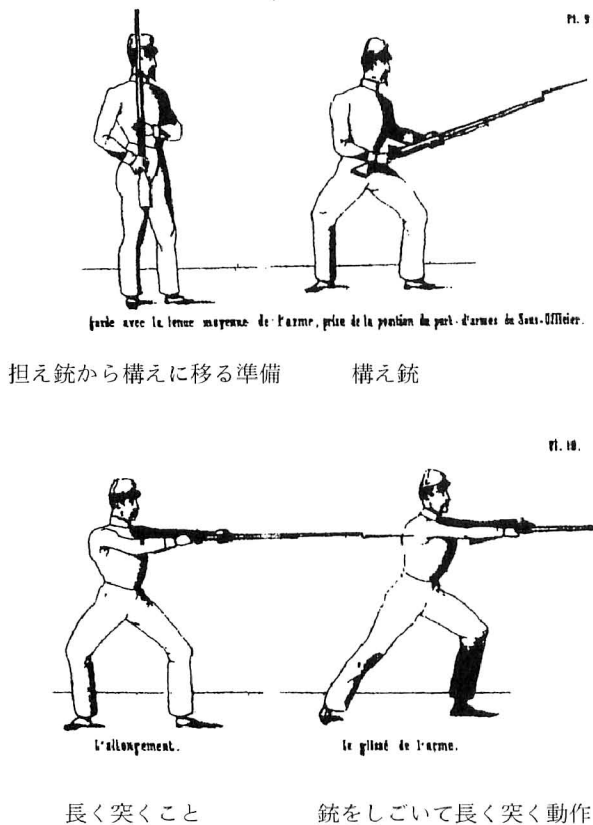
ド・ビラレー中尉は「日本式剣術教育は、爾今廃止し、フランス式剣術を教育すべきこと」と、当時の陸軍卿西郷従道に進言し、これが採用されて、わが国独特の銃剣術は疎んぜられるところとなった。しかし、フランス式剣術はスポーツ的な考えが主体をなしていたものであるから、実戦的な利用価値に欠ける面もあり、各地方では定

着せず、陰では日本古来の槍術・剣術を中心とした銃剣術、剣術が根強く行われていた。

1887年（明治20年）11月にド・ビラレー、キエールの両名が帰仏するに及んで、再びわが国の銃剣術が^{よみがえ}蘇り、1890年（明治23年）陸軍戸山学校長大久保春野は、フランス式銃剣術・剣術を廃止して、日本式の銃剣術・剣術を復活することとし、同校の体操科長である津田教修（津田一伝流の継承者）が陸軍の剣術教範の改正を担当し、1892年（明治25年）日

図～1

フランス陸軍ミュール式銃剣術（1830年代）



本古来の銃剣術及び剣術が軍隊の正式科目に採用されたのである。

史実として残っているのは、上野国立博物館所蔵の宝蔵院流槍術秘事（寛政 10 年 4 月，早川長左衛門手記）が銃剣術に引用されており，その構えにおいては，「敵の左拳にわが肩を比べ候らえば格好あうなり」を参考にして考えられており，銃剣の長さも「肘より指先までの長さを適当とする」旨の記述が参考にされたようである。

返突動作については，「上段に構えたところへ素槍下段より十文字槍の前横手へ付ける時に前に引き落として突くなり」は，右の払い技に利用され，枯華と名付けられた技で「素槍下段小右の脇にかかり突き出すところを，逆に打ちて突くなり」は左の払い技に継がれ，「相下段の素槍より腰の上を突きし時，横手にかぶりかけ，素槍の柄にそいて拳ぎわをすり突きて勝つなり」は下の払い突きに受け継がれている。

また，「浦波」という槍の突き技が「押圧の突き技」に，体を転じての突き技が銃剣道における「体を開いての仕掛け技」に用いられている。（剣術の心理学的研究，昭和 2 年成武堂を参考）また明治 30 年に発行された「槍体操」は，棒・薙刀・銃剣術において活用されるべき事が述べられている。

銃剣術に引用された槍術流派には上記のほか，佐分利流，正田流，貫流等が中心であったことを窺い知ることができる。

明治 25 年当時の銃剣術に用いられた用語の主なものは次のとおりである。

- 「直^{チョク}突^{トツ}」銃剣の位置を変えることなく真直ぐに突く技
- 「脱^{ダツ}突^{トツ}」右手を少し上げて剣先を下げ，剣先の交叉を反対側に外して突く技
- 「切^{キリ}突^{ツキ}」両手を上げ，相手の剣先の上部より突く技
- 「突^{ツキ}下^{シタ}」剣先を下げて相手の下胴を突く技
- 「繰^クり突^{ツキ}」相手との間合いが遠い場合に，銃剣を左掌中を滑らせて突く技
- 「打^ダ撃^{ゲキ}，押^{オウ}圧^{アツ}」相手の銃剣を打ち払い，除去して突きを容易にする技術
- 「隙^{ゲキ}突^{トツ}」相手が払い，打った後の隙を捉えた突き技
- 「遏^{カッ}突^{トツ}」相手の数度の連続突きの際の空隙を突く技
- 「佯^{ヨウ}突^{トツ}」連続した突き
- 「機^キ会^{カイ}の突^{ツキ}」相手の動作の起こりを捉えた突き技

以上の技術が銃剣術の技術の原点であったとすることができる。

その後，1915 年（大正 4 年）に銃剣術教範の改正が行われ，1925 年（大正 14 年）には，大日本武徳会の独立科目として銃剣術が認められ，国民体育大会の前身的存在と言える明治神宮大会には第 1 回大会（1924 年）から銃剣術が参加している。

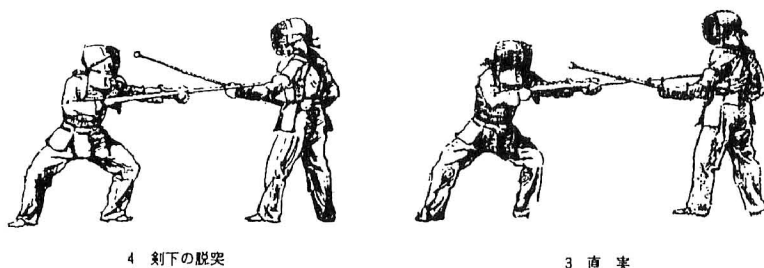
銃剣道の名称は，1940 年（昭和 15 年）の樫原神宮武道大会から用いられ，翌 41 年（昭和 16 年）には大日本銃剣道振興会が創設され，「術」のみではなく武士道精神

の修行を加味した教育的武道としての普及に努めたが、1945年8月の終戦とともに銃剣道は活動を禁止されるに至ったのである。

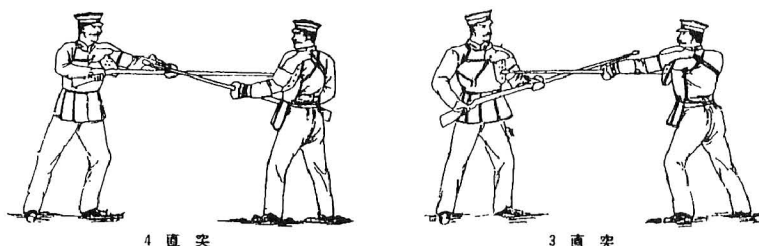
明治・大正・昭和年代の銃剣術の基本的動作の変遷は図～2のとおりである。

図～2

明治22年当時の銃剣術動作（明治25年教範の原形）



大正4年における銃剣術動作



昭和年代も本資料が原形となっている。

銃剣道の再興

1945年（昭和20年）までの銃剣道は、創設の経緯から考えても戦技的色彩が強く、教育目的においても「銃剣の使用に習熟し、近接戦闘における自信を与えるに足る体力、気力を養成にある」ことであつたが、現在の銃剣道は戦技色を払拭し、日本古来の美風である武道精神を基軸において、槍術の極意である『突き技』を継承修行し、心身を鍛練し、社会に有為な人間形成に役立てることを目的として、1956年（昭和31年）に全日本銃剣道連盟を創設し再生を図ったものである。

創設当時は、戦前銃剣術に対する批判ムードが強い時代でもあり、銃剣道の普及には多くの障害があつたが、当時の連盟会長今村 均氏、理事長鶴沢尚信氏及び草地貞

吾氏をはじめとする、諸先輩の文字通り臥薪嘗胆しての尽力により、漸く再興の道づくりが成されたのである。

1970年（昭和45年）に社団法人全日本銃剣道連盟の設立が認可され、1973年（昭和48年）には日本体育協会への加盟が承認され、1980年（昭和55年）から国民体育大会の正式競技種目となり、毎年の国民体育大会において成年男子・少年男子の部の競技会で活気ある試合を展開しているところである。全日本銃剣道連盟が毎年恒例的に開催している全国的な競技大会は、

4月には全日本銃剣道優勝大会（団体試合）

8月には全日本少年武道（銃剣道）練成大会（小中学生対象個人・団体試合）

全国高校生銃剣道大会（団体・個人試合）

全日本青年銃剣道大会（19歳～24歳対象団体・個人試合）

全日本銃剣道選手権大会（個人試合）

10月には国民体育大会銃剣道競技大会（都道府県対抗試合）

2月には全日本短剣道選手権大会（団体・個人試合）

であり、逐年隆盛をみている。

銃剣道の活性化対策

銃剣道の活性化を考える場合には、武道としての銃剣道をどのように蘇らせるかと言う観点と、スポーツ競技としての銃剣道をどのように発展させるかと言う観点の両面から考えていく必要がある。

（１）武道としての銃剣道の活性化

わが国の武道は、その源泉は武士社会が必要とした武技を修練する過程において身体的発達と精神的発達が良い影響をもたらし、伝統的な美風として国民各層により結果を与えてきた意義を見出し、これを普及発展に結びつけることに努めるべきであるように思っている。

武道は武技を活用して修行・稽古することを重ねて心身の発達を図るものであるが、この場合、武道と言う抽象的な表現だけで「私は武道をやっている」とは言わない。

武道を志す人は、いきなり武道に取り組むのではなく、先ず武道を習得しようとする前に、何れかの武技を選択し、真剣かつ厳しく学ぶ過程において武技の本質を体得し、その発展段階で武道の何であるかを習得するものである。

銃剣道を修行しながら武技としての真髄を極め、精神的には「誠実」「礼節」「信義」

「勇気」「質実剛健」及び「克己心」等の資質を養い、ひいては武道としての教育目的を達成しようとする考えは、他の武道種目と何ら変わるところはないものである。特定の武技に武道が存在するのではなく、いわゆる武芸十八般それぞれに独自の指導理念があり、これまでの歴史的背景・用いる武技の特性を活かして指導していく過程において、人間形成に必要な資質を教え込んでいく事が武道の本質であると思っている。

銃剣道は動きにおいて起こり（前兆行動）が少なく、一挙動で真直ぐに突出す技を最良のものとしているので、単純な突き技の中にも奥深い真理のあることを理解させる必要がある。習字の稽古においても字画の少ない文字ほど難しいと言われるように、銃剣道も単純な「突き技」の反復であるが、やればやるほどの蘊奥を極めることに意思力の強さが要求される。焦らず、諦めずに努力する習慣づけをして、何時如何なる場合でも平常心を保ち、驚き、懼れ、疑い、惑うことの心の乱れを抑え、油断しない気持ちで自分を向上していくことに結びつける事ができれば、精神面の活性化が図られることを基礎において指導していき、室鳩巢が唱えた「明君家訓」にある節義の士たる者の具現が必要かつ望ましい姿であると思っている。

（２）武道競技としての銃剣道の活性化

スポーツ競技種目が多様化し、興味本位に走る傾向の強い現況において、銃剣道のみが修行道の追求に孤高を保つことは崇高な考えではあるが、次代を担う青少年に魅力を感じさせるものがなければ活性化は難しく、将来性はおぼつかないものに陥る事であろう。前項では真剣で厳しい学習が武道の本質であると論じながら、興味を与え魅力的な実践活動をすることの矛盾が、指導の過程においてのし掛かってくるが、硬軟自在の指導活動により活性化を図っていかなくてはならない。

銃剣道では、指導体系の見直しを行うとともに、「銃剣道教則」及び「試合審判規則」の改正を果たし、用具・稽古着等も武道に相応しいものに改善し、「分かりやすく、スピーディーで美しく、正しい」武道種目に育て上げていくことによって活性化を果たしていきたいと思っている。具体的には年代に応じた競技の在り方を考え、少年段階には基本を忠実にしかも興味が持てるような「形演技の試合」方式を採用し、高齢者の試合にも「形演技の試合」方式を取り入れ、少年期より高齢者に至るまでの文字通り生涯スポーツとしての存在意義を高めていく考えである。（現在の銃剣道図～３）

（３）審判制度の活性化

銃剣道の試合を活気溢れるものにするか、盛り上がりのないものにするかは、一に懸かって審判の適否にかかっていると申しても過言ではない。特に銃剣道は突き技の一瞬を判定して勝敗を採決する訳であり、木銃の剣先の動きは烈しく、また、突き技

図～3

現在の銃剣道



は突いて抜かなければ有効技とはならないものであるから、見極めに厳しいものがある。従って銃剣道の審判員には、突き技に対する眼光紙背に徹した厳しい判定眼、公平無私な審判態度、銃剣道に対する理論的、技術的な見識熟練度が必須の条件であるので、審判員の技術等級のランク付けをして公正な試合運営を図ることが重要であり、試合者はじめ観客が満足のいく試合運営に当ることが活性化の原点であると思う。

突き技の決定的瞬間を見逃したり、誤審があったりするようでは、試合者の銃剣道意欲を阻害するのみではなく、斯道の存在意義を失墜しかねない問題であるので、審判員の養成指導を徹底し、緊張感のみなぎった中において分かりやすい審判をすることによって、銃剣道の活性化を図っていきたい。

現行の審判員等級は上位より、A級、B級、C級にランク付けをして資質・技術の向上に努め、銃剣道が分かりやすく魅力ある武道種目となる地位を維持していきたい。

結 語

武道としての銃剣道が再興されて47年が経過した今日においても、戦前の不幸なイメージが完全に払拭されていないと言う、宿命的な課題を背負わされているが、これは銃剣道に原因があるものではなく、斯道を指導普及する当事者の考え方に起因する問題があることを深刻に認識し、武道としての銃剣道を実践する事が精神的・身体的によい結果を醸成し、社会に貢献できる人間形成に役立つことを追求していくことが、銃剣道の存在意義を高めると言う認識に立って、地道な普及活動を進めていきたいものとする。

現在は少子化時代であることに加えて、興味をそそるニュースポーツや、見て楽しむテレビゲーム等に関心と呼んでおり、本来鍛錬的である武道種目を敬遠する風潮があることを直視し、鍛錬と楽しさを両立させることへの対応と、単純なことから複雑なものへの関心を高め、生涯を通じて身体活動ができ、余暇の有効活用と生き甲斐感と、試合後の満足感が得られる銃剣道の模索を図っていききたいものである。

大学剣道選手の国際適応力

The Intercultural Adjustment Potential of University Kendo Players

小森富士登* 武内政幸** 若山英央***

岡田龍司**** 平山聡子***** デービット・マツモト*****

(* 国士舘大学, ** 大東文化大学, *** 国際武道大学,

**** 近畿大学, ***** San Francisco State University)

Fujito Komori* Masayuki Takeuchi** Hidenaka Wakayama***

Ryuji Okada**** Satoko Hirayama***** David Matsumoto*****

(* Kokushikan University, ** Daitobunka University

*** International Budo University, **** Kinki University

***** San Francisco State University)

1. 【緒 言】

日本は現在、多岐の分野でまさしく「国際化」が進行している。国際化時代の今日、国際社会との関係を見放しては国として立ち行かないことは周知のことである。

しかし、世界には厳然として「異となった文化」が存在しており、この異文化の理解なくして政治・経済をはじめ種々の活動は難しくなる。したがって、異文化の理解や異文化への適応力の育成は今後あらゆる分野で課題になり、「異文化」を越えるための心理特性を理解することは益々重要になると思われる。剣道界として例外ではない。

さて、剣道界においては、1970年に国際剣道連盟が設立されてから2000年10月現在、41カ国・地域を代表する団体が加盟するまでに発展している。学生剣道界においても例外ではなく、海外遠征や国際剣道セミナーなどが開催されており、また大学では海外指導実習や外国剣士の留学生も増えてきており益々国際化が進行している。

全日本剣道連盟は「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」とし、その理念を掲げている。日本では人間形成の有効な手段として教育界にその根をおろし知育・体育・更に道徳教育の一環として考えられ、教育組織における体育教育のプログ

ラムとして現在も存在しており、多くの剣道修行者や特に剣道指導者は、この理念に基づき剣道修行における数多くの利点を説いている。また、この理念に基づき剣道の稽古や指導を行ってきたのである。

しかし一方では、今日の剣道の現状は剣道本来の姿ではないとか剣道の教育的価値を指導上活かされていないなどの批判も聞かれる。その結果として、文化的価値の忘失・武道精神の希薄化¹⁰⁾・スポーツ化による試合偏重主義傾向³⁾などの問題が山積みされているのである。

このような色々な議論のなかには、剣道は本当に人間形成に役立つのか？また、この国際化時代を生きていく若い人達の教育に剣道は有効に機能しているのかと云ったものもあり、剣道指導者とりわけ学校教育での剣道指導者の責務は大きいと思われる。

スポーツをはじめ武道の科学的研究が年々その重要性が高まるなか、剣道の修行が本当に人間形成に効果があるのであれば、その効果を公式に報告することは当然のことであると思われる。しかし、剣道選手の道徳的特徴を測った信頼性や妥当性のある研究報告は、われわれ知る限り見当たらない。

そこで本研究では、剣道の正しい普及・発展をはかり、益々加速する国際化時代に適応する大学剣道選手の育成と、また指導者として指導理念の確立を目標に、大学剣道選手の国際適応力の心理的要素について研究し、剣道の稽古が有効な精神的かつ心理学的結果と関連することを検討するものである。

2. 【研究方法】

(1) ICAPS (Intercultural Adjustment potential Scale) について

異文化適応が成功するための要素についての研究は、これまでに様々な角度・テーマより多くの研究者より膨大な数の研究が報告されている。しかし、これらの研究の多くは、例えば相手国や自国についての知識や言語・会話能力、赴任前の体験など知識要素についてのものが中心で文化や文化の相違などをどのように考えるかなど、いわゆる文化的観点から異文化適応性を測っているものが多く^{1) 2) 4) 5) 6) 7) 11)}、異文化への適応、異文化間コミュニケーション、それぞれ各国の文化に適したテストの必要性、ステレオタイプ的な文化の特徴などで欠ける点があるとの指摘がある⁸⁾。

今までそのような研究が行われていなかった大きな理由の一つとして、人格にプラス面の変化をもたらすと思われる幾つかの心理的または道徳的スキルを測るための信頼性の高い確かな手段が無かったのである。さらに、大抵の心理学分野で開発されたテストや測定法は日本以外の国や外国人（大抵はアメリカ人である）に視点を当てて

作成されたものであり、日本人に対するこのようなテストの妥当性の一般化にはかなりの限界があるといえる。

しかし、最近の異文化心理学や異文化コミュニケーションの分野の著しい進歩が、この隔たりを小さくしている。

マツモトらは、異文化適応における成功・不成功を決定する最も重要なプロセスの一つは、自分および相手の感情の処理の仕方であり、つまり、知識・認識の問題ではなく、それらは感情面からのアプローチであるとの結論から、1995年以来、心理的観点から異文化適応性を測る ICAPS の研究に着手し、異文化適応能力と呼ばれる尺度 ICAPS を開発したのである。

その尺度とは、日本人被検者延べ2000名にのぼる母集団を対象に作られたもの（ここで用いられた日本人集団を準拠集団とする）で、その妥当性は確実なものである。ICAPS は個人が持つ国際的、異文化的、さらに社会適応性などに必要とされる心理的スキルの度合いを測るものであり、①感情制御 (Emotion Regulation)、②開放性 (Openness)、③柔軟性 (Flexibility)、④自主性/創造性 (Autonomy/Creativity) の4つの主要心理スキルからなっている。さらに、その ICAPS は総合得点も計算され、一般的異文化適応性をも測ることができるようになっている。マツモトらは、合計16もの ICAPS の研究を発表しており、それらの一連の研究結果⁹⁾「Development and Validation of Intercultural Adjustment Potential in Japanese Sojourners:The Intercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS)」を International Journal of Intercultural Relations に報告している。それらは、Internal, Temporal,さらに Parallel フォームなどを用いた信頼性や Construct (Convergent と Divergent と Incremental を含む) と Predictive (Concurrent と Proscriptive を含む) との妥当性を十分に検討した研究であり、この ICAPS は標準化されている。

本来、ICAPS は異文化心理学や異文化コミュニケーションの分野での使用を目的として作成されたものであるが、剣道修行の心理学的相関の研究にもその応用性があると考えられている。この尺度が含む領域である感情制御 (Emotion Regulation)、開放性 (Openness)、柔軟性 (Flexibility)、自主性/創造性 (Autonomy/Creativity) は、剣道修行に必要な心理的特徴に全て関連しているのである。特に、感情制御 (Emotion Regulation) は制御、自己規制、感情コントロールなどに関係しており、剣道修行の一つの目的ともいえる精神形成のすべてに深く関連していると考えられる。また、全体的に社会適応性の尺度である ICAPS の総合得点も剣道修行重要な心理学的関係を示していると考えられる。

ICAPS を用いた様々な研究では、結婚満足度や人生への満足度、カルチャーショック、うつ病、不安感、一般的社会適応性などの人生におけるさまざまな大きな問題が ICAPS と相関関係があると報告されている。それゆえに、この尺度の有用性は心理学やコミュニケーションにおける研究だけではなく、剣道の研究分野においても大きなプラスと考えられる。したがって、この尺度が社会適応性形成に関連する心理的スキルを測るために、剣道修行の目的でもある「人格」の概念を直ちに評定することができると思われる。

このように、心と人格の形成は剣道修行に伴うものであるといわれている。また、全日本剣道連盟は「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」を剣道の理念として掲げており、剣道修行の成果を ICAPS を用いて検討することはきわめて重要と思われる。

(2) 質問紙及び調査方法

質問紙は、前述したマツモトラが作成した ICAPS を用いた。この ICPS（個人的思考や意見に対する調査）は

- ①感情制御 (Emotion Regulation)
- ②開放性 (Openness)
- ③柔軟性 (Flexibility)
- ④自主性/創造性 (Autonomy/Creativity)

の 4 つの領域に分類された 55 項目を用いた。(表 1)

これらの項目はランダムに配置され、それぞれの項目は 7 段階評価尺度法によって調査を行った。なお、調査は 2001 年 11 月に実施した。

(3) 被検者

本研究の調査対象は、日本の 5 大学剣道選手 460 名（男子 335 名、女子 115 名）、学年は 1 年から 4 年、年齢は 18 歳から 27 歳 ($M=19.94$, $SD=1.26$)、経験年数は 5 年から 18 年 ($M=12.01$, $SD=2.95$) である。

(4) 分析方法

分析方法は、調査後回収された資料より、「全く同意しない」… 1 から「非常に同意する」… 7 の 7 段階評価の調査内容を得点化し、それぞれの得点について、これまでマツモトラの一連の研究で行われた因子分析の結果より、上記の 4 領域の得点と因子スコアを計算した。また、総合点も計算し、その領域得点と総合点を日本人準拠

表1 個人的思考や意見に対する調査

下の7段階の尺度を用いて以下の項目に答えて下さい。各項目のあなたの答えを最もよく示す数字を選んで下さい。例えば、その項目に強く同意する(又は非常に当てはまる)場合は7を右の空欄に書き入れて下さい。そして、その項目にまったく同意しない(又はまったく当てはまらない)場合は1を書き入れて下さい。

	全く同意しない		どちらでもない		非常に同意する		
	1	2	3	4	5	6	7
1. 空想をふくらますことが好きだ							1
2. 自分の夫や妻に異性の友人がいてもかまわない							2
3. 自分の夫や妻に異性の友人がいてもかまわない							3
4. 緊迫した状態に陥ると不安になる							4
5. 誰かが不平等な扱いを受けているのを見ても、それほど気にならない時もある							5
6. 普通は緊張時にうまく対処できる							6
7. 自分はとても優しい人だと思う							7
8. 子供の尻を叩くことは、最もよい罰の方法だ							8
9. 普段はあまり悩まない							9
10. 心配したり、怖いといったことがめったにない							10
11. うまくいかないかもしれないとよく心配する							11
12. 人と話しても、それほど楽しいと感じない							12
13. いつも他人より劣っていると感じる							13
14. 上司が周りにいると居心地が悪い							14
15. 何か間違ったことをしたら、それを人に隠したい							15
16. 普段自分が無力に感じるので、誰かに改善して欲しいと思う							16
17. 世の中には、本当にどうしようもない人達がいる							17
18. 一般市民は、政府の決定に影響を与えることができる							18
19. バレーやモダンダンスを観るのは退屈だ							19
20. マリファナを吸うことは、酒を飲むより害が少ない							20
21. 俳句が好きだ							21
22. 喜びや悲しみを強く感じなければ、人生は退屈だろう							22
23. 香りは昔の思い出を呼び覚ます							23
24. 自分は頑固だ							24
25. 何事も毎回同じようにすることが好きだ							25
26. 他人がすることを気にすべきでない							26
27. 新しい食べ物を試すのが好きだ							27
28. 家にいるのが好きだ							28
29. みんな規則を守るべきだ							29
30. 変化を与えるためだけに、部屋の模様替えをすることがある							30
31. 休暇の予定を立てるのは好きではない							31
32. いろいろな考えをめぐらすのが好きだ							32
33. 普段は幸せだと感じている							33
34. 自分が周りの人を差し置いて成功するのは、ほとんど運で決まると言っている							34
35. 子供の頃は、学校を休むために仮病を使うことがあった							35
36. すぐ怒る							36
37. あまり興奮することがない							37
38. 親切にすることは一番良いことだ							38
39. 自分は古風だと思う							39
40. 子供の頃、家出をしたと思った							40
41. 現代の子供達の問題は、親が子供に十分に罰しない点にある							41
42. 移民がこの国をだめになっている							42
43. 誰も信用しない方がいい							43
44. 詩を書いてみたことがある							44
45. 死刑制度を支持する							45
46. 両親はいつも私に厳しかった							46
47. 頭のいい人は、私を居心地悪くする							47
48. 水深が深い所は怖い							48
49. 男性と女性という時は、普通セックスのことを考えている							49
50. 馬鹿な人だけが伝統的な生活を変えようとするものだ							50
51. 性的なことに関する雑誌を処分したがる人は、精神的に正常ではない							51
52. 自分の体に満足している							52
53. 宇宙の起源について考えるのが好きだ							53
54. 性教育を行うことは良いことだ							54
55. 女性も男性と同じように性的自由を持つべきだ							55

氏 名(ふりがな)	性 別	男・女	所 属	大 学		
	年 齢	才	学 年	年	段 位	段
	経験年数	年	海外旅行の有無			有・無
競技開始時期	小学校以前・小学校低学年(1.2.3年)・小学校高学年(4.5.6年)・中学校・高等学校					
公式戦出場の有無 を○印でお答え下さい	1.国際大会 2.学生地区レベル(県大会・地区大会等) 3.学生全国レベル(国体・優勝大会・選手権大会等) 4.出場なし					

集団の平均値 ($M=50$), 標準偏差 ($SD=10$) を用いて T-Score に換算した。さらに, 性差・大学間・学年間・段位間さらに剣道経験および年齢との ICPS 得点の相関関係も調査した。

3. 【結果と考察】

(1) 日本人準拠集団と大学剣道選手の比較

表 2 は, 日本人準拠集団と大学剣道選手の比較を示したものである。

大学剣道選手の ICAPS 総合得点 ($M=49.84$, $SD=11.88$) で, 準拠集団より低いものの有意差は見られなかった。しかし, 4 領域下位尺度の感情制御 (Emotion Regulation) は ($M=39.26$, $SD=7.72$)・開放性 (Openness) は ($M=42.80$, $SD=8.34$) で, 準拠集団より有意に低かった。自主性/創造性 (Autonomy/Creativity) は ($M=53.26$, $SD=10.21$) で, 準拠集団より有意に高い結果であった。また, 柔軟性 (Flexibility) は ($M=49.23$, $SD=9.40$) で, 準拠集団との有意差は見られなかった。

(2) 日本人準拠集団と大学男子剣道選手と大学女子剣道選手の比較

表 3 は, 日本人準拠集団と大学男女剣道選手の比較を示したものである。

大学男子剣道選手の ICAPS 総合得点は ($M=49.84$, $SD=12.15$), 大学女子剣道選手の ICAPS 総合得点は ($M=49.53$, $SD=11.29$) で, 大学男女剣道選手とも準拠集団より低いものの有意差は見られなかった。しかし, 4 領域下位尺度の感情制御 (Emotion Regulation) は, 大学男子剣道選手は ($M=39.34$, $SD=7.91$), 大学女子剣道選手は ($M=38.90$, $SD=7.40$) で男女とも準拠集団より有意に低くかったが, 大学男女剣道選手間の比較では有意な差は見られなかった。

開放性 (Openness) は, 大学男子剣道選手は ($M=42.17$, $SD=7.91$), 大学女子剣道選手は ($M=45.09$, $SD=8.86$) で男女とも準拠集団より有意に低くかった。しかし, 大学男女剣道選手間の比較では有意な差は見られなかった。

柔軟性 (Flexibility) は, 大学男子剣道選手は ($M=48.79$, $SD=9.89$) で準拠集団より有意に低くかった。しかし, 大学女子剣道選手は ($M=50.52$, $SD=8.05$) で準拠集団より高いものの有意差は見られなかった。また, 大学男女剣道選手間の比較では有意な差は見られなかった。

自主性/創造性 (Autonomy/Creativity) は, 大学男子剣道選手は ($M=52.89$, $SD=10.09$), 大学女子剣道選手は ($M=54.37$, $SD=10.73$) で男女とも準拠集団より有

表2 日本人準拠集団と大学剣道選手との比較

Item	Groups	大学剣道選手群
	N	460
Total 合計	Mean	49.83
	S, D	11.88
	T-test	0.30
Emotion Regulation 感情制御	Mean	39.26
	S, D	7.72
	T-test	29.85**
Openness 開放性	Mean	42.80
	S, D	8.34
	T-test	18.52**
Flexibility	Mean	49.23
	S, D	9.40
	T-test	1.75
Autonomy/Creativity 自主性/創造性	Mean	53.26
	S, D	10.21
	T-test	6.85**

P<0.01**

表3 日本人準拠集団と大学男女剣道選手・性差間の比較

Item	Groups	大学剣道男子選手群	大学剣道女子選手群	T-test
	N	335	115	
Total 合計	Mean	49.84	49.53	n. s
	S, D	12.15	11.29	
	T-test	0.30	0.51	
Emotion Regulation 感情制御	Mean	39.34	38.9	n. s
	S, D	7.91	7.40	
	T-test	19.51**	11.91**	
Openness 開放性	Mean	42.17	45.09	n. s
	S, D	7.91	8.86	
	T-test	14.34**	5.26**	
Flexibility	Mean	48.79	50.52	n. s
	S, D	9.89	8.05	
	T-test	0.56	0.56	
Autonomy/Creativity 自主性/創造性	Mean	52.89	54.37	n. s
	S, D	10.09	10.73	
	T-test	5.29**	4.69**	

P<0.01**

意に高かった。また、大学男女剣道選手間の比較では有意な差は見られなかった。

(3) 大学間の比較

表4は、大学間の比較を示したものである。

大学間については、ICAPS 総合得点では有意な差は見られなかったが、4 領域下位尺度では大学間に有意な差が認められ多重比較 (Tukey Test) の結果、感情制御 (Emotion Regulation) については、D 大学は (M=38.14, SD=5.51) で B 大学 (M

表 4 大学間の比較

Groups		A大学	B大学	C大学	D大学	E大学	F-test
Item	N	164	70	39	111	76	
Total 合計	Mean	49.79	52.71	49.10	48.07	50.23	n. s
	S, D	10.67	13.61	10.46	12.87	11.63	
Emotion Regulation 感情制御	Mean	38.58	41.44	38.99	38.14	40.47	*
	S, D	6.53	9.30	6.34	5.51	7.55	
	Tukey test	<div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div>					
Openness 開放性	Mean	42.65	42.57	38.93	43.91	43.72	*
	S, D	8.17	8.60	6.57	8.13	9.12	
	Tukey test	<div><div></div><div></div><div></div><div></div><div></div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div> <div></div>					
Flexibility 柔軟性	Mean	48.18	50.38	49.13	48.55	51.51	n. s
	S, D	7.52	8.81	10.49	10.98	10.24	
Autonomy/Creativity 自主性/創造性	Mean	53.79	52.84	55.30	53.09	51.71	n. s
	S, D	10.07	9.83	7.03	10.47	11.73	

P<0.05*

=41.44, SD=9.30), E大学 (M=40.47, SD=7.55) に比べ低い得点を示した。

開放性 (Openness) については, C大学は (M=38.93, SD=6.57) でB大学 (M=42.57, SD=8.60), D大学 (M=43.91, SD=8.13), E大学 (M=43.72, SD=9.12) に比べ低い得点を示した。

柔軟性 (Flexibility), 自主性/創造性 (Autonomy/Creativity) については, 大学間に有意な差は見られなかった。

(4) 年齢, 経験年数と ICAPS との相関

表 5 は, 年齢, 経験年数と ICAPS との相関を示したものである。

ICAPS 総合得点と年齢, 剣道経験年数との相関関係において, 有意な差が認められなかった。しかし, 4領域下位尺度において, 大学剣道選手の年齢は, 感情制御 (Emotion Regulation) と柔軟性 (Flexibility) との間に正の相関を示し, 開放性 (Openness) と負の相関を示した。また, 経験年数は, 開放性 (Openness) と負の相関を示した。

(5) 学年別の比較

表 6 は, 学年別の比較を示したものである。

学年別については, ICAPS 総合得点では有意な差は見られなかったが, 4領域下位尺度では学年間に有意な差が認められ多重比較 (Tukey Test) の結果, 感情制御 (Emotion Regulation) と柔軟性 (Flexibility) については, 4年生が他の学年よ

表 5 大学剣道選手の年齢と経験年数と ICAPS との相関

	年齢	経験年数
合計 (Total)	0.081	-0.022
感情制御 (Emotion Regulation)	0.151**	0.026
開放性 (Openness)	-0.134**	-0.162
柔軟性 (Flexibility)	0.118*	0.079
自主性／創造性 (Autonomy/Creativity)	-0.049	-0.026

NB: All significance tests two-tailed. $P<0.05^*$ $P<0.01^{**}$

表 6 大学剣道選手の学年別の比較

Item	Groups	1年生 (N=148)	2年生 (N=129)	3年生 (N=94)	4年生 (N=77)	F-test
	N					
合計 (ICAPS Total)	M	48.37	50.54	49.13	52.49	2.28
	SD	13.00	11.05	10.64	12.65	
感情制御 (Emotion Regulation)	M	37.70	39.37	39.22	42.27	6.00**
	SD	8.36	6.82	6.69	8.70	
開放性 (Openness)	M	44.77	42.51	42.07	41.17	4.15**
	SD	7.95	8.62	7.81	8.31	
柔軟性 (Flexibility)	M	47.65	49.22	48.77	53.11	5.94**
	SD	9.17	9.07	10.08	9.10	
自主性／創造性 (Autonomy/Creativity)	M	53.73	53.51	52.65	52.32	0.46
	SD	9.85	9.65	11.65	9.78	

 $P<0.01^{**}$

り高い得点を示した。一方、開放性 (Openness) については、1 年生が 4 年生よりも高い得点を示した。

(6) 段位別の比較

表 7 は、段位別の比較を示したものである。

段位別の比較については、ICAPS 総合得点では有意な差は見られなかったが、4 領域下位尺度では段位間に有意な差が認められ多重比較 (Tukey Test) の結果、柔軟性 (Flexibility) において、4 段所有者が他の段所有の学生よりも高い得点を示した。

以上の結果、本研究の被検者である日本の大学剣道選手は、男女とも日本人準拠集団と比べ ICAOS 総合得点では有意な差は見られなかった。しかし、4 領域下位尺度では、男子は感情制御 (Emotion Regulation)・開放性 (Openness)・柔軟性

表 7 大学剣道選手の段別間の比較

Item	Groups N	貳段 (N=26)	参段 (N=365)	四段 (N=53)	F-test
合計 (ICAPS Total)	M	51.00	49.58	50.54	0.30
	SD	14.05	11.74	12.24	
感情制御 (Emotion Regulation)	M	39.43	38.97	41.13	1.82
	SD	7.68	7.73	7.93	
開放性 (Openness)	M	42.7	43.20	40.49	2.53
	SD	9.88	8.15	7.69	
柔軟性 (Flexibility)	M	47.69	48.83	53.01	4.96**
	SD	14.06	8.91	9.69	
自主性/創造性 (Autonomy/Creativity)	M	54.13	53.31	52.98	0.11
	SD	8.07	10.02	11.65	

P<0.01**

(Flexibility) で、女子は感情制御 (Emotion Regulation)・開放性 (Openness) の面で日本人準拠集団より劣っていることが解った。

特に、大学男女剣道選手の感情制御 (Emotion Regulation) の分野は、日本人準拠集団と比べ低い得点を示している。感情制御 (Emotion Regulation) は感情コントロールと関係しており、それはプラスで、かつ構成的であり、また意味ある人生経験を導き、自分の利となるように上手く自分の感情を使いこなすことである。このことから、大学男女剣道選手は感情コントロールを行う技術を身に付けていないと考えられる。

これは、感情コントロールや自己規制・制御の発展が剣道修行で副次的に得られると考えられてることと対照的である。

また、大学男女剣道選手の開放性 (Openness) の分野も日本人準拠集団と比べ低い得点を示している。開放性 (Openness) は、新しい経験・知識を取り入れようとする能力であり、大学男女剣道選手はこの能力を身に付けていないと推察された。

このように、大学剣道選手が社会的・国際的・異文化的レベルでの交流やコミュニケーション、さらに適応性に必要とされる幾つかの重要な心理的スキルが欠けていることが推察される。

それゆえに、本研究結果は大学剣道選手の修行が「剣道の理念」の妥当性に疑問を投げかけたのである。

これは、近年指摘されてきた勝利至上主義傾向の大学剣道の実態を反映しているとも考えられる。

4. 【まとめ】

剣道は、日本においては人格形成の有効な手段として教育界にその根をおろし体育・知育・さらに道德教育の一環として考えられてきた。また、世界においては2000年10月現在、41カ国・地域を代表する団体が国際剣道連盟（IKF）に加盟するまでに普及・発展している。これは、世界的に剣道修行の効果が認められたと考えられる。

本研究の目的は、剣道の正しい普及・発展をはかり、益々加速する国際化時代に適応する大学剣道選手の育成と、また指導者として指導理念の確立ため大学剣道選手の国際適応力の心理的要素について研究したものである。

日本の大学剣道選手（460名）の被検者が ICAPS（Intercultural Adjustment potential Scale）を受け、その得点と2,000人以上の日本人準拠集団の ICAPS 得点とを比較した。剣道修行の効果が心理的性質の形成に伴うものであるという考えへの妥当性を実験的に検討した。

その結果、次のような結論が得られた。

- 1) 大学剣道選手（460名）の被検者の ICAPS 総合点は、日本人準拠集団より低いものの有意差はなかった。しかし、感情制御（Emotion Regulation）・開放性（Openness）は準拠集団より有意に低かった。また、柔軟性（Flexibility）は準拠集団との有意差はなかった。自主性／創造性（Autonomy/Creativity）は、準拠集団より有意に高かった。
- 2) 大学男子剣道選手と大学女子剣道選手の ICAPS 総合得点は、日本人準拠集団より低いものの有意差はなかった。しかし、4領域下位尺度では、男子は感情制御（Emotion Regulation）・開放性（Openness）・柔軟性（Flexibility）で準拠集団より有意に低かった。女子は感情制御（Emotion Regulation）・開放性（Openness）で準拠集団より有意に低かった。柔軟性（Flexibility）は準拠集団より高いものの有意差はなかった。しかし、自主性／創造性（Autonomy/Creativity）は、男女とも準拠集団より有意に高かった。
- 3) B 大学と E 大学の ICAPS 総合得点は日本人準拠集団より高く、A 大学と C 大学と D 大学の ICAPS 総合得点は日本人準拠集団より低いものの各大学共に有意差はなかった。また、大学間においても有意差はなかった。しかし、4領域下位尺度の感情制御（Emotion Regulation）において、D 大学は B 大学と E 大学に対して有意に低かった。開放性（Openness）においては、C 大学は B 大学と

D 大学と E 大学に対して有意に低くかった。

- 4) 大学剣道選手の年齢と経験年数と ICAPS との相関では、感情制御 (Emotion Regulation) と柔軟性 (Flexibility) が年齢と正の相関を示し、開放性 (Openness) は年齢と経験年数に負の相関を示していた。
- 5) 大学剣道選手の学年別比較では、4 年生が他の学年より感情制御 (Emotion Regulation) と柔軟性 (Flexibility) に高い得点を示していた。一方、開放性 (Openness) において、1 年生が 4 年生より高い得点を示していた。
- 6) 大学剣道選手の剣道の修行の成果を表す段位においては、弐段・参段・四段の ICAPS 総合得点の有意差はなかった。しかし、4 領域下位尺度の柔軟性 (Flexibility) において、四段所有者の方が弐段・参段所有者より高い得点を示した。
- 7) これらのことから、大学剣道選手は社会的・国際的・異文化的レベルでの交流やコミュニケーションなどに必要とされる幾つかの重要な心理的スキルが欠けていることが推察される。

本研究の一部は、日本体育学会第53回大会及び日本武道学会第35回大会にて発表した。

引用・参考文献

- 1) Berry, J. W. (1994). Acculturation and psychological adaptation. In A. M. Bouvy, F. J. R. van de Vijver, P. Boski & P. Schmitz (Eds.), *Journeys into cross-cultural psychology* (pp.129-141). Lisse, Netherlands: Swets & Zeitlinger.
- 2) Berry, J. & Sam, D. (1997). Acculturation and adaptation. In J. W. Berry, M. H. Segall, and C. Kagitcibasi (Eds.), *Handbook of cross-cultural psychology, Vol 3: Social and behavioral applications*. Boston, MA: Allyn and Bacon.
- 3) 月刊武道 317号 (4月号). pp.118-121 1993年.
- 4) Fukukawa, T. (1997). Sojourner readjustment: Mental health of international students after one year's foreign sojourner and its psychological correlates. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 185, 263-268.
- 5) Fukukawa, T. & Shibayama, T. (1993). Predicting maladjustment of exchange students in different cultures: A prospective study. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 28,

142-146.

- 6) Fukukawa, T. & Shibayama, T. (1994). Factors influencing adjustment of high school students in an international exchange program. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 182, 709-714.
- 7) Hammer, M., Gudykunst, W., & Wiseman, R. L. (1978). Dinensions of intercultural effective-ness: An exploratory study. *International Journal of Intercultural Relations*, 2, 382-393.
- 8) Matsumoto, D. (1999). 日本人の国際適応力. 本の友社.
- 9) Matsumoto, D., LeRoux, J., Ratzlaff, C., Tatani, H., Uchida, H., Kim, C., & Araki, S. (2001). Development and validation of intercultural adjustment potential in japanese sojourners: The Intercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS). *International Journal of Intercultural Relations*, 1, 28.
- 10) 田中鎮雄：「文部省の学校武道指導指針の史的展開過程（1）」*武道学研究* 第13巻3号 1981年.
- 11) Ward, C. (2001). The A, B, C's of acculturation. In D, Matsumoto (ed.), *Handbook of culture and psychology*. New York: Oxford University Press.